「ニュースキャスター」についての雑感

辻　　一　郎

Miscellaneous Thoughts on Anchors

TSUJI Ichiro

好きなニュース番組とニュースキャスター

2001年10月、大手前大学社会文化学部で「放送文化論」を受講している学生を対象に、「好きなニュース番組」と「好きなニュースキャスター」について、複数回答を是としてアンケートを実施した。回答を得たのは69人。回答数が少ないので参考データにしかならないが、それでもある程度の傾向はつかめなくもない。

これによれば、まず「好きなニュース番組」では、

- ニュースステーション　(ANN)　26%
- NEWS 23　(JNN)　14%
- ニュース JAPAN　(FNN)　10%
- めざましテレビ　(FNN)　6 %
- ニュースの森　(JNN)　6 %
- きょうの出来事　(NNN)　6 %
- ワールドビジネスサテライト　(TXN)　4 %
- その他　14%
- 好きなニュース番組はない　14%

との回答を得た。意外に思えたのは、NHK の「ニュース10」をあげた回答が僅かに１人だけだったことと、これだけ「ニュースステーション」が支持されているにもかかわらず、「好きなキャスター」では、

- 久米宏　15%
- 筑紫哲也　14%

- 安藤優子　10%
- 木村太郎　9%
- その他　17%
- 好きなキャスターはいない　35%

となっていて、久米宏をあげる回答が必ずしも多くはなかったことである。これとよく似た現象は、関西大学社会学部2部での回答でも見うけられた。ここでの回答者は、「放送メディア論」を受講している学生の43人。これまたサンプル数が少ないが、まず「好きなニュース番組」についての回答は、

- NEWS 23　(JNN)　21%
- ニュースステーション　(ANN)　18%
- きょうの出来事　(NNN)　8%
- ニュース JAPAN　(FNN)　8%
- NHK ニュース10　(NHK)　5%
- ワールドビジネスサテライト　(TXN)　5%
- その他　12%
- 好きなニュース番組はない　23%

であり、次に「好きなキャスター」についての回答では、

- 筑紫哲也　13%
- 久米宏　8%
- 安藤優子　5%
- 小宮悦子　5%
- その他　5%
- 好きなキャスターはいない　64%

となっていて、大手前大学の場合と同様、「好きなニュース番組」が必ずしも「好きなキャスター」と連動していないことをうかび上がらせた。アメリカの調査ではニュースの視聴動機がキャスターと連動している事例が多いが、日本ではキャスターにひかれてニュースを見ることが比較的少ないことを示していて興味深い。

なお関西大学の田宮武がいまから14年前の1988年、受講生437人を対象に、「日頃よく見ているニュース番組」についての調査を行った。この時の回答では、「ニュースステーション」と答えた者が73.5%にも達している（注1）。それとくらべて現在では、「ニュースステーション」の好感度が大きく下がり、好きなニュース番組が分散化していることがよくわかる。

ニュースキャスターの登場

ロバート・ゴールドバーグとジェラルド・J・ゴールドバーグが、『トップキャスターたちの闘い』(平野次郎訳　原題『Anchors — Brokaw, Jennings, Rather and the Evening News』) のなかでこんなことを書いている (注2)。

> キャスターたちがいま果たしている役割は奇妙なものだ。ゴリラ、怪物、土足、恐るべき雪男……どういう呼び名にせよ、キャスターが唸れば人びとは耳を傾ける。彼らはテレビが生み出した最も優れた記者という単純な理由から、キャスターの座に昇りつめた。書き手としてはおそらく大したことはないだろうし、編集者としてもそこそこだろう。しかし3人とも大変なアドリブの名手だ。見ただけで刺激され、喋るのを聞けば信用する。

ここにいう「3人」とは、原題を見れば一目瞭然の通り、NBCのトム・ブロコー(Nightly News with Tom Brokaw)、ABCのピーター・ジェニングス (World News Tonight)、CBSのダン・ラザー (CBS　Evening News with Dan Rather) で、2002年を迎えても、アメリカでトップの座にあるキャスターたちである。

しかしそれにしても、キャスターが「書き手として大したことはない」はともかく、「編集者としてもそこそこ」とは手厳しい。日本でいうキャスターがアメリカではアンカーと呼ばれていることは原題にもある通りだが、その彼らは、名刺の肩書に「Anchor」とは書いていない。「Executive-Editor」と書いている。つまり「自分は編集者だ」と名乗っており、キャスターにとってもっとも大事な役割は、「ニュースについて、最終責任をもつ編集者であることだ」との自負をいだいている。その彼らに対して、これはずいぶん思い切ったことを言ったものだ。

さて「怪物」呼ばわりされているこのキャスターの歴史は、さほど古いものではない。世界で最初のキャスターは、周知の通り、CBSニュースのエド・マローである。

1951年11月にスタートした週一回のテレビ番組、「シー・イット・ナウ」でマローがキャスターの座についた時から、キャスターの歴史は始まった。以来、ようやく50年だ。

ではこのエド・マローとはどんな人物か。彼の名前がアメリカで知られるようになったのは、1938年3月、ナチスドイツがオーストリアを併合した直後のウィーンの生々しい状況を、現地から電話リポートで伝えて以来のことである。その2年半後、マローは第2次世界大戦のなかで、ロンドン大空襲の模様をラジオで伝えることになる。この時マローは、空襲警報がなりわたり高射砲の炸裂音がすさまじいロンドン市内を、オープンカーで猛烈なスピードで走りまわって取材し、BBCのスタジオに入って、自分の目で見た大空襲の実

態を、「ジス……イズ　ロンドン」「こちらはロンドンです」という出だしのリポートで伝え注目された。

アレキサンダー・ケンドリックが『ヒトラーはここにいる』のなかに記しているところでは（注３）、「ジス」を強く、一拍おいて「イズ」とつづける彼の口調は、トレードマークになり、当時のアメリカ人はラジオにしがみついて、遠くヨーロッパからおくられてくるマローの声に聞き入ったという。また田草川弘の『ニュースキャスター・エド・マローが報道した現代史』によれば、マローは大変なマイク恐怖症だったということだ。本番が近づくと、膝ががくがく震えだし、額に汗が吹き出した。シャツは大雨にあったようにぐっしょり濡れた（注４）。スター記者とマイク恐怖症のこのとりあわせは面白い。

1940年９月17日に放送されたマローの原稿がのこっている。なかなかの名文である。

> ロンドンの街並を薄茶色の落葉がいくつも、風に舞ってとんでいきました。自動車が停まる音をお聞きになれたと思います。冬の訪れを前に、落葉は寒そうに小さな音を立てて姿を消していきます。ケンシントン・ガーデンの丸い池の近くで、鴨が、まがもでしたが、水辺の草の上に集まって昼寝をしていました。鳥たちは疲れていたのです。砲火や爆撃のために一晩中、眠れなかったのです。今日はすでに空襲警報が６回鳴りました。

エド・マローのリポートは、聴取者の視覚に働きかけて伝えたところに特色がある。彼はこうした表現を「ピクチュア・ワード」と呼んだ。

余談だが、NHKの磯村尚徳もパリ特派員当時、マローと同じ系譜のリポートを行ったことを、新井直之が『放送リポート』の1982年９月号で紹介している。磯村のリポートは例えばこう切り出された。

> パリから磯村がお伝えします。このところパリは細かい雨が降って肌寒いほどの涼しさです。灰色の空をバックにして雨に煙る灰色の建物、すべてに調和のとれたこのパリの街並みを見ていますと、フランス文化への尊敬の気持ちが湧いてくるのですが、一度政治の現実にたち返れば、ドゴール大統領がバラ色の将来を国民に約束して１ヵ月も経たないというのに……（注５）

磯村はこんな語り口で、パリ市民のドゴール批判をニュースで伝えた。並べてみると２人のリポートは、情緒豊かな風景描写ではじまるあたり、たしかに似ていなくもない。「磯村はマローの影響をうけたのだろう」と考えたくなるところだが、新井直之はそれを否定して、パリ特派員時代の磯村は、まだマローの存在を知らなかったはずだと書いている。

そしてその上で新井は、「リアリティを生かした現場からの報道という思いが、偶然二人の報告に共通するものを作り出した」にちがいないと記している（注６）。

この磯村が帰国後、外信部長の職を経て、1974年から担当したのが、画期的な試みとして話題をよんだNHKの「ニュースセンター９時」である。彼は21時から21時40分という当時としては思い切った時間帯のこの番組の初代キャスターに起用され、水をえた魚のように活躍して、テレビニュースに新しい時代をもたらした。しかしこれについてはあとで述べる。

さて話を本題にもどすと、ロンドン時代のマローはやがて、「同時性」という電波メディアの特性を生かして、ロンドン大空襲を実況ナマ中継で伝えようと考えついた。放送マンであれば誰もが考えつくくわだてである。しかしイギリス政府は、空襲下でのナマ放送は敵に重大な情報を伝えるおそれがあるとの理由で、なかなか許可を与えなかった。

彼は６度もテスト版の録音を作って申請し交渉したが、ラチがあかないとみてとるや、親交のあったチャーチル首相に直訴してようやく許可をものにして、こう伝えた。

> わたしはいま、ロンドンを見渡せる屋上に立っています。いまのところすべては静かです。国家と個人の保安上、いま、わたしがしゃべっている正確な場所を、お伝えすることはできません。(略)おそらく１分以内に、ごく近くで砲声が聞こえてくると思います。(略)まだ、すぐ近くの高射砲は、なりを静めています。サーチライトは、ほとんど真上を捜しています。さあ、すぐに、もっと近くで２発の爆発音が聞こえますよ。それ、始まりました！　あの耳をつんざくばかりのすごい音です（注７）。

この放送でマローは、「ナマ中継を生み出した男」といわれ、さらに「現場のアクチュアリティを伝えた男」ともいわれた。このマローの後継者が、51年後、湾岸戦争で登場する。多国籍軍の空爆下、宿舎の窓の外を眺めながら、17時間にわたってバグダッドでいまおこりつつある状況を、交代でマイクを握りしめて伝えたCNNの３人の記者、ピーター・アーネット、バーナード・ショー、ジョン・ホリマンである。

> 視聴者のみなさんのためにわれわれの目のまえの光景を説明しましょう。……バグダッドの空は光り輝いています。……まばゆい光が空全体を覆っています。……ピーター、どうぞ……
> 対空放火が空に向かって放たれています。……まだ爆弾が地上に落ちた音は聞こえていませんが、空には途方もない光が、稲光のような光があります。バーニーどうぞ……（注８）

1940年のロンドンからの生中継と、1991年のバグダッドからの生中継は、半世紀の時代をへだてて、ともに同じ手法で行われた。彼らは目に入るもの、耳に入るものを、次から次へとそのまま表現して事態を伝えた。東京大学の水越伸は、このそれぞれの報道に「共通しているのは、彼らがテクノロジーに追従したのではなく、それをジャーナリズムの論理にしたがって道具として十分に駆使しながら、それぞれの時代状況で、もっともインパクトのあるジャーナリズム活動を実践していった点だ」(注9)と書いている。これはなかなかすぐれた指摘である。マローはロンドン空襲という非常時のなかで、ラジオというメディアの特性を最大限、活用することに成功した。

エド・マローの「シー・イット・ナウ」での戦い

第2次世界大戦の最中ヨーロッパを中心に活躍し、名声を高めてアメリカにもどってきたマローを待ちうけていたのは、テレビの仕事だった。その新しいメディアでマローは、1951年、世界で初めてのテレビのニュースキャスターとして登場する。それが先に記した「シー・イット・ナウ」である。これは人々の表情と声、つまりインタビューと映像を重視したニュース番組であり、マローは特に「Little Pictures」(さりげない映像)を大事にした。そしてその映像に、シャープで簡潔なコメントをつけた。

彼の当時の語録がのこっている。「実際にやってみて分かったのだが、テレビのことばは簡潔が第一だ。沈黙がいかに雄弁か。沈黙こそ最高のスクリプトだ」(注10)。マローが目指したのは、「映像」にできるだけ多くを語らせるニュース番組だった。

そして彼はこの「シー・イット・ナウ」を通じて、アメリカの歴史にのこる大きな役割を果たすことになった。1950年当時、アメリカに旋風をまきおこしていたマッカーシー上院議員を失脚に追い込んだのである。

ジョゼフ・マッカーシーは当時、共産党員を告発して追い立てる「赤狩り」をヒステリックに推進して、全米に恐怖をまきちらしていた。「政府のもっとも重要な一部局である国務省は、共産主義者によって荒らされている。私はその57人のリストを持っている」(注11)。このマッカーシーの跋扈を許し、力をあたえたのは、当時の世界情勢だった。1949年、中国に共産党政権が誕生し、翌年には、朝鮮戦争が勃発する。こうした世界の状況は、「憎むべき共産主義」との思いを、多くのアメリカ人にいだかせた。そしてそうした風潮をバックにマッカーシーは、「アメリカ政府のなかにいる共産党員は、ソビェトや中国の呼びかけに応じて、アメリカの共産化を画策している。彼らをそのまま放置しておくのは危険だ」と騒ぎ立て、それとおぼしき人物を告発した。思想信条の問題でいったん疑いをいだかれると、晴らすのは至難である。不可能だといってもいい。マッカーシーの告発で不当に職場を追われるケースが続出した。

この事態を「アメリカの民主主義の危機」とうけとめた人物のひとりにマローがいた。しかしウカツには手を出せない。相手はいま、アメリカでもっとも権勢をふるっている人物である。下手に手を出せば、自分もアカのシンパとみなされ、滅亡に追い込まれるおそれがある。そうしたある日、マローは新聞でこんな記事を読んだ。

父親と妹が反政府的な新聞を読んでいるというだけの理由で、アメリカ空軍の若い予備役兵、ミロ・ラドゥロビッチ少尉が、アメリカ空軍から退職を迫られている。彼がその勧告を拒否すると聴聞会が開かれ、「解雇するように」との文書が空軍長官に送られた。しかし空軍長官は、まだ結論を出していない……。

これを読んでマローはスタッフに、話題にとりあげられている本人と、家族のインタビュー取材を命じた。

あがってきたフィルムのなかでラドゥロビッチは、「空軍は私の忠誠を疑っているわけではない。父と妹が読んでいる新聞を問題にしているだけだ。家族との関係を絶てば空軍にとどまることを許すといっているが、そんな要求は理不尽だ」と語っており、彼の父親は、「大統領閣下。みなが息子に、悪いことをしている。息子はこの国に育ち、国のために尽くしてきた。その息子に正義をあたえて欲しい」と訴えていた。また父親が読んでいた問題の新聞とは、チトー支持をかかげるセルビア語の新聞であることも判明した。

マローはスタッフが取材した素材を使って番組をつくり、最後をこうしめくくった。

「彼の父親と妹が共産主義者だという告発が事実かどうかは、われわれには判断できません。しかし一つはっきりしていることがあります。それは息子が父親の罪で裁かれてはならないということです」

次にマローはマッカーシーがこれまでに行ってきた発言の検証に着手し、それを集大成して番組を制作した。人身攻撃が目的としか思えない、わざとらしいマッカーシーの中傷演説。居丈高に証言者を追い詰めていく演技や駆け引き。相手をやっつけ得意満面になっているその表情。マローはこうした映像と言葉を丹念につづって再現することで、デマゴーグ・マッカーシーの正体を浮かびあがらせた。

そしてマローは、「いまや、マッカーシー上院議員のやり方に反対する人びとは、沈黙を守っていていい時ではありません。われわれは、われわれの遺産とわれわれの歴史を否定することはできます。しかしわれわれは、その結果の責任から逃れることはできないのです」(注12) と語って番組をしめくくった。彼がいう「われわれの遺産と歴史」とは、いうまでもなく、自由を尊び、恐怖で理性をくもらせることのないアメリカ憲法の精神である。

この番組を見たアメリカ人は、4,000万人にのぼったといわれている。CBS には放送の直後から、12,348人の視聴者からの反応がよせられたが、その内容は15対1の割合でマローに好意的だった。そしてこれをきっかけに、絶大な影響力を誇ったマッカーシーは人気を失い、やがてアメリカの狂気の時代は終わりを告げた。

1990年秋、雑誌『ライフ』が、「20世紀でもっとも重要なアメリカ人」の特集号を出したとき、放送、新聞を含めたすべてのジャーナリストのなかから選ばれたのは、マローだった。そして同じCBSでマローの伝統をついで、やがて「イヴニング・ニューズ」を舞台に活躍することになるのが、ウォルター・クロンカイトである。しかしその話に入る前に、日本でのキャスターニュースの歴史にもふれておこう。

日本でのキャスターニュースの歴史

日本で最初のキャスターニュースは、1961年、日本テレビ（NTV）が音楽家の黛敏郎、映画評論家の荻昌弘らを起用してスタートさせた昼のワイドニュースである。しかしこれは昼ニュースであったため、せっかくの試みであるにもかかわらず、さほどのインパクトをもたらさなかった。ついで翌1962年10月、TBSを中心とするJNNの手で、本格的なキャスターニュース、「ニュースコープ」が夕方の時間帯でスタートした。ここには田英夫や戸川猪佐武、ややおくれて古谷綱正など現役のジャーナリストが参加した。

古谷は直前まで毎日新聞で論説委員をつとめ、コラム「余録」の執筆者だった。毎日新聞在職中は名文家としてならしたが、同時にさわやかな語り口の持ち主で、キャスターとしてうってつけの人物だった。1975年、古谷はキャスターとして日本で最初の「日本記者クラブ賞」を受賞している。

古谷は「ニュースコープ」では意見を言わないことを信条とした。むろん主張がなかったわけではない。主張は人一倍もっていたが、言わなかった。なぜか。民放労連主催の「報道フォーラム82」で語った内容が、『放送リポート』の1982年9月号に掲載されている（注13）。

> 実は私も、むかしは、キャスターは主張を入れたほうがいいと思っていました。キャスターはアナウンサーと違うのだから立場や主張を出すべきだと思い、毎日ではないが問題のありそうな日は、番組の最後に1分間時間をとって主張を述べていたことがあります。ところが現在は、現在といってもだいぶん前からですが、キャスターは主張すべきじゃないと私は考えています。
>
> ニュースについて、公正中立とか不偏不党とか客観報道といったことがよく言われますが、キャスターや放送記者が本当にそのようなニュースを出しているつもりでいるとしたら、そのキャスターはよほどのバカか、そうでなければ何もかも承知のうえのまやかしで公正中立を装っているだけだと思います。ですから、キャスターは自分の立場というものは必ず持っているべきだと私は思います。が、しかし、ニュースではそれを出すべきではないと考えているわけです。それは公正中立を侵すから言うべ

きではないというのではなくて、損得の問題として、損だから言わないのです。(略)キャスターがニュースの中で自分の意見を言うというのは、最も損なやり方だと思います。本当に見識のある視聴者は、その主張に賛成でも反対でも、「何だこの野郎、いい気になって」と思って、かえって軽蔑するのではないでしょうか。

また古谷とともに初期の「ニュースコープ」を支えたキャスターの田は、共同通信の文化部長からTBSに転じ、端正な容貌と語り口で人気を得た人物だが、彼も「自分が取材したり確認したりしたのではないニュースを、ワケ知り顔で分析したりコメントを加えて伝えることは権力が放送に介入する口実をつくることになり危険だ」(注14)との考え方にたち、自分が直接関与したニュース以外では、意見をさしはさむことを控えていた。その田が意見を述べたのは、1967年、北ベトナムを取材して制作した「ハノイ・田英夫の証言」に於いてである。この番組はこんな出だしではじまった。

私はこの夏、一ヵ月にわたって北ベトナムに入り、自由主義国としてはじめて、テレビ取材をしてきました。私が北ベトナム取材を思いたったのは、実は私どもが日本にいて知りうるベトナム戦争のニュースというのは、南ベトナム側のニュース、つまりアメリカ側のニュースが大部分だからです。北から見た場合、ベトナム戦争はいったいどういう風に写るのか、これを私は知りたかったのです。

このリポートは、戦時下の北ベトナムの生々しい状況を伝えるとともに、非人道的なアメリカの北爆の実態をあばいて反響をよんだ。だが衝撃的なこの放送が原因になり、田はやがてキャスターの座を退くことになる。しかしそれはもうしばらく先の話である。

「ニュースコープ」には、このあと朝日新聞で「天声人語」を担当していた入江徳郎などもキャスター陣に加わり、代表的な民放ニュースに成長して、これを主軸に「報道のTBS」とか、「報道のJNN」と呼ばれる時代を招来した。

1974年、NHKはこうしたニュース状況に、一石を投じる大冒険にとりくんだ。それが先にふれた磯村尚徳をキャスターとする「ニュースセンター9時」である。この番組で磯村は、「読んで伝えるのではなく、語りかけて伝えるニュース」を開発した。またキャスターであると同時にエディターとして、ニュースの並べ方に口を出し、視聴者と同じ目の高さでニュースを見たり考えたりする姿勢をとった。

当時、「ニュースセンター9時」が放送界にあたえた衝撃は大きかった。これが登場した時、朝日放送にいて、のちに立命館大学に移る岡村黎明は、「正直しまったと思いました」と書いている。これこそが民放がまっ先に手がけるべき“面白い”ニュース番組ではなかったか、と頭をかかえたというのである(注15)。それほどこのニュースは斬新だった。

磯村は後日、この番組にとりくんだ時の心境を、「ニュースというものは本来 H_2O なんですな。黒いインクが入っても困るし、赤いインクも困る。とくにNHKは法的な制約がありますから、水でなければ困るわけです。しかし私の番組はウイスキーの水割り程度、少し活気のある水にしようという点で、7時のニュースとちがう。片方は H_2O、ぼくのところはアルコールが入る」と語り、同じNHKのニュースであっても、「7時のニュース」とはちがうスタンスでのぞんだことをうちあけている。また「ニュースセンター9時」のなかでの自分の役割は、「カッコよくいえば主役兼演出の宇野重吉みたいなものです。プレーイング・マネジャーというか、キャスターというのは、本来それでなければ、キャスターじゃないと思います。それでなければ私も引きうけないですよ」とも語っている（注16）。

このようにウイスキーの水割りを目指した磯村も、ニュースのなかで意見をいうことはさし控えた。「論説はやるべきではない。ぜんぜんメディアがちがいますから」と彼はいう。「論説は新聞にまかせるべきだ」が、彼の持論だった。

磯村は「ニュースセンター9時」にとりくんで4年目、「日本記者クラブ賞」を受賞した。古谷綱正が同じ賞を受賞して2年後、キャスターとして2人目の受賞だった。

ウォルター・クロンカイトがつくった伝統

「JNNニュースコープ」が誕生したのと同じ1962年、テレビの本場アメリカに、「大統領よりもアメリカ人に信頼されている男」とのちに評されるようになったキャスターが登場した。「CBSイヴニング・ニューズ」のウォルター・クロンカイトである。彼は1981年まで、実に19年間にわたってその座にあった。

彼の先輩、マローは、「単にニュースを伝えたのでは、視聴者を“事実”という海のなかに放りこむようなものだ。視聴者が泳げようと泳げまいとお構いなしに海へ放りこんではいけない。視聴者に考えてもらうためにも、キャスターは自分の意見をいうべきだ」と考えていた。しかしクロンカイトは、「キャスターは客観的な事実を伝えるだけにとどめるべきだ。あとの判断は視聴者にまかせるべきだ」と考え、「キャスターは意見をいわない」との姿勢を生涯つらぬいた。そのクロンカイトが、たった一度、原則をまげて、テレビで意見を語ったことがある。ベトナム戦争の取材に赴き、報道特別番組をつくった時のことだ。彼はこの番組の最後をこんな言葉でしめくくった。

> 今日、われわれは勝利に近付いていると言うとすれば、それは、これまで明らかに過ちを続けてきた楽観主義を信じることにほかなりません。一方、われわれは敗北の淵に立たされていると言うとすれば、それは、いわれのない悲観主義に屈服することで

あります。したがって、われわれは膠着状態という泥沼にはまり込んでいると言うのが、不満足ではありますが、唯一、現実的な結論のように思われます。……ここから抜け出すための、理に適ったただ一つの道は、勝利者としてではなく、民主主義を守るという誓いに忠実に最善の努力をしてきた名誉ある国民として交渉の場に臨むことであるとの思いを、私は一段と強めるに至りました（注17)。

まわりくどい言い方で、一回読んだだけでは何を伝えようとしているのかよく分からないコメントだが、これを聞いた当時のジョンソン大統領はテレビのスイッチを切り、「クロンカイトを失ったことは、アメリカの中間層を失ったということだ」と落胆の表情をかくさなかったといわれている。それほど衝撃的な発言だった。そしてこの放送の5週間後、ジョンソンは次の大統領選挙に出馬しないことを表明した。

私は1981年11月、ニューヨークのCBSニュースを訪ねてクロンカイトに会い、キャスターの心得を聞いたことがある。すると彼はまず、「アナウンサーがキャスターになってはいけない」と語りかけてきた。

「アナウンサーは喋ることについてのプロだが、キャスターにとってもっとも大事な資質は、いかにうまく喋るかではなく、今日何を取材し、どのニュースをどんな視点でとりあげるかを決める能力、つまりエディターとしての能力だ。それを考えれば、キャスターは活字ジャーナリスト出身であることが望ましい。またキャスターが真先に心がけなくてはならないのは、ニュースを正確に、公正に伝えることであり、そこには個人的な意見をさしはさむ余地はない。ただキャスターもロボットではなく人間だから、つい本音が出そうになることもある。しかしその本音は極力おさえるよう努めるべきだ。ニュースで意見を言うことが許されるのは、現場で取材するリポーターだけだ」。クロンカイトはそう断言した。

また彼は著書にこうした意味のことも書いている。「テレビニュースは優れた新聞の代わりにはなれない。国民がニュースの情報源をもっぱらテレビに頼るようになれば、民主主義の屋台骨が危うくなる。テレビはいまの時代が直面している複雑な問題の輪郭を示し、その全体像を説明するという点は不得手だからだ。テレビニュースは、ほんの二、三言の発言をきりとってニュースの全体を伝えようとしている。こうした伝え方は、議論を単純化するだけではなく、政治不信を招く元凶になる。例えばアメリカの大統領選挙で放送された大統領候補のスピーチの長さは、平均して、9.8秒だ。これで意味のある内容を伝えられるわけがない」(注18)

クロンカイトはこのように述べ、テレビは非常に強い影響力をもつメディアだが、ニュースを伝えるという点では限界があると指摘した。「キャスターは意見を言うべきではない」との彼の主張は、この「テレビの限界」と、いわば表裏の関係にある。そしてクロン

カイトのこの姿勢は、「CBS イヴニング・ニューズ」での後任者、ダン・ラザーにも引き継がれた。それだけではない。NBC のトム・ブロコーや ABC のピーター・ジェニングスなど、今日のアメリカを代表するキャスターは、いずれも同じ姿勢をとっている。

しかしそれにもかかわらず、これは「NEWS 23」のキャスター筑紫哲也の指摘するところ（注19）だが、アメリカのキャスターには、ニュースのリードで主観をまじえた伝え方をすることが多いようだ。視聴者に、「なぜこのニュースを大きくとりあげる」のかを説明するにあたって、かなりふみこんだ言い方をしないと、意が通じないと判断してのことらしい。たとえば沖縄でのアメリカ兵による少女暴行事件をとりあげたイヴニング・ニューズで、ダン・ラザーはこう切り出した。

> 日本の沖縄は戦略的に重要な位置を占めており、第二次世界大戦で、太平洋で最大の激戦地でした。日本に返還された今も米軍基地は友好的な形で残っています。しかし、日本の子どもへの恐ろしい犯罪で日米関係の古傷が開いてしまいました。今週、アメリカの大使は全面的に謝罪しましたが、わがハットリ特派員はそれだけでは全く不十分だとリポートします――（注19）。

このほかアメリカのキャスターが意見を述べた最近の例としては、同時多発テロ事件当日の2001年９月11日に放送された「ABC ワールド・ニューズ・トゥナイト」で、ピーター・ジェニングスが、「ブッシュ大統領はシークレット・サービスの影に隠れていないで、国民に面とむかって、テロリストの攻撃から国を守れなかった自らの失策について語るべきである」(President Bush should quit hiding behind the Secret Service, come out and face the nation, and explain his failure to protect the country from these terrorist attacks) と語ったケースがある。この発言は、早速、「ワシントンポスト」の餌食になった。

このようにいくつかの例外があるとはいえ、アメリカのネットワークニュースのキャスターが、意見の表明を抑えている背景には、彼らの舞台、イヴニング・ニューズの放送時間が、僅か30分しかないことも手伝っている。意見をいっても30分では舌足らずになり、誤解を招くおそれがあるからだ。また「意見を伝えるのは新聞、テレビはおこった事実を少しでも早く伝えることが肝要だ」との合意が、大衆とメディアの間に暗黙のうちに成立しているからだともいえそうだ。

加えてアメリカには、キャスターがどんな発言をしたかをチェックする組織がある。「メディア・ウォッチ」とか「アキュラシー・イン・メディア」と呼ばれる民間団体で、すべてのニュース番組のコメントを活字にし記録している。誰が中東問題でどんな発言をしたか、テロ事件でどう伝えたか、すべてが活字化されていて、見たい人は誰でも閲覧するこ

とが出来るしくみになっている。この存在もキャスターの自由な発言を、あるいは多少制御する役割をはたしていると言えるかもしれない。

久米宏と筑紫哲也

日本の民放が夕方のニュースだけでは満足できなくなり、ゴールデンタイムと呼ばれる夜の時間帯に本格的にうって出たのは、1984年10月からとりくんだ「ニュースコープ」の19時20分までの枠大を別にすれば、1985年10月の「ニュースステーション」が最初である。

プライムタイムと呼ばれる22時にスタートし、23時20分までの1時間20分間をベルトで通すというANNのくわだては、当初、無謀な冒険に写り、多くのテレビ関係者が、「視聴率がふるわないテレビ朝日の捨てばちな挑戦」と冷やかに見た。同様の意見は、テレビ朝日の社内にもあった。

また報道育ちのニュースマンはテレビ朝日の制作体制を問題視した。「ニュースステーション」では報道局がすべてのニュースを仕切るのではなく、企画部分など主要部分を外部プロダクションのオフィス・トゥー・ワンが担当することにしたからである。ワイドショー番組とごく初期のテレビニュースを別にすれば、日本のテレビで報道局以外のところが中心になってニュースを手がけたのは、このときが最初だったといってよい。

スタートしたばかりのころの内容はひどいものだった。むろん、視聴率もさんざんで、途中打ち切りの噂もとんだ。久米自身、1995年7月号の『文藝春秋』で、当時を思い出してこう語っている。

> 案の定、見るに耐えない番組でした。初日から散々で番組終了後は延々反省会をやったらしいんですね。ところが僕はその存在すら、最初の一週間くらい知らなかった。しばらくして誰かに、“すいませんけど、終わったあと反省会、毎日やってるんですけど”って言われたくらい、意志疎通がうまくいってなかったんですね。その反省会だって、カメラワークがなっとらんとか、スィッチャーはひどいとか、もう苛め合いです（注20）。

この窮状を救ったのは、やがてとびこんできた2つのビッグニュースだった。放送開始4か月後の1986年1月におこったスペースシャトルの爆発事故と、その翌月におきたフィリピンの2月革命である。いずれのニュースも番組の途中にナマでとびこんできて、その後の経緯を時々刻々伝えたが、このときの久米のさばき方が見事だった。

後者の場合は、番組に入ったとたん久米のもとに、「マルコスがマラカニアン宮殿を脱出した」との第一報がもたらされた。つづいてアキノが大統領就任式にのぞむ映像が入って

きた。これをうけて久米は、彼一流のポーズでこう伝えた。

> ではニュースステーションではアキノさんをフィリピンの大統領と認めましょう。たった今からはマルコス元大統領、アキノ大統領にします。たぶん世界のニュースの中でこれがいちばん早いでしょう（注21）。

番組終了直前には、シュルツ米国務長官のアキノ政権承認の談話もCNNからナマで入り、この日の「ニュースステーション」は、マルコス逃亡からアキノ政権誕生までのハイライトを、リアルタイムですべて伝える結果になった。

とびこみニュースへの久米の見事な対応を、FNNのキャスター木村太郎は、「テレビに対する類まれなる運動神経のよさ」（注22）と評し、「ニュースステーション」は久米のこの運動神経のおかげで躍動していると述べている。

たしかに彼は、さりげなく振る舞いながらも、視聴者がいま何を望んでいるかをしたたかに読んで番組を進行させ、カメラがいまどのサイズで、何を撮っているかを確認しながら身を処している日本で唯一人のキャスターだ。だからいつでもレンズの中玉を見られるよう、プロンプターを使わない。こうした久米のありようは、テレビのメカニズムを熟知したテレビマンの所作であり、余人には真似ができないところだろう。

また「ニュースステーション」は、徹底的に分かりやすさを追求した初めてのニュースでもある。スタジオに模型や図表、人形といった小道具をもちこみ、キメ細かく見せる工夫を本格的にとりいれたのも、これが最初だった。やがて「ニュースステーション」の視聴率は急上昇し、コンスタントに20％前後を記録するようになる。特に関西地区での反応の鋭さが目についた。

この成功を見て、2年後、TBSも森本毅郎を起用して、22時台に進出した。「ニュース22プライムタイム」である。この時からテレビ界は、ニュース戦争と呼ばれる事態に突入した。しかし「プライムタイム」は「ニュースステーション」を抜くことはできなかった。

この時、久米は、「本当は筑紫さんが来たらヤバイと思ってましたね。ニュースステーションとは全く違う、きちんとしたニュース番組を筑紫さんの解説でやられたらかなわない」（注23）と感じていたという。しかし出てきたのは筑紫ではなく森本だった。1年後に森本は小川邦雄に交替。さらにその1年後の1989年10月、久米がおそれていた筑紫がようやく登場する。「ニュースステーション」と1時間おくれの時間帯で始まった「NEWS23」である。

以来すでに12年。この間、NHKは平野太郎で「ニュース・トゥデー」（21時～22時20分）、NNNは桜井良子で「きょうの出来事」（23時～23時55分）、TXNは小池百合子で「ワールドビジネスサテライト」（23時30分～24時15分）などをスタートさせた。しかし各社の

キャスターが、その後次々に交替していったなかで、久米と筑紫のふたりはいまもキャスターにとどまっている。

このふたりは一見、対照的な存在であるように見えながら、ニュースに対する考え方の根っ子の部分に多くの共通点を有している。たとえばふたりは、ニュースのなかで自分の意見を表明することに、何のためらいもいだいていない。

まず筑紫はインタービューに答えて、「これからマルチメディアの時代になって、テレビが160チャンネルになった時に、キャスターが全部公正中立で同じことしか言わないということになったら、誰も見ないですよ。だいたい今の民放のニュース戦争と呼ばれているものは、それぞれの番組とその番組を代表するキャスターの個性で競っているわけでしょう。そういう時代に入っているのにキャスターのコメントを無色透明にすることがテレビなんだという議論はどうかということです。(略) 僕はアメリカとは違ってキャスターは101人いれば101通りのキャスターがいていいと思います」(注24) と話している。

また久米も、「発言するときに何を軸に置くか。やっぱり体制のチェックだろうと思うんですね。マスコミの使命とは、時の権力を批判すること以外にない、と僕は信じてます」と言い、「僕はこれからもテレビという媒体を通じて、その時々に“これが久米宏の考えだ”っていう意見を背伸びせずに伝えていきたいと思います。その発言の行間を読んで、視聴者の方々に自分自身の判断を下していただければいい」(注25) とも語っている。

ここまでは筑紫も久米も同じである。しかし発言の仕方や、番組進行についての心構えとなると、ふたりの間には根本的なちがいがある。まず発言内容に関しては筑紫が論理的であるのに対して、久米はどちらかといえば感覚的だ。場合によっては言葉ではなく、眉をしかめたり、肩をすくめて表現する。それでいて言葉をフルに駆使する筑紫よりも、的確に意を伝えているのは、久米のプロたる所以だろう。

また「芸人というかテレビタレント」と自らを称し、「民放の競争相手はさんま、たけし、タモリなんですよ。ニュース番組といえども、彼らと勝負できないといけない」(注26) と語る久米から見れば、自分が出演している番組がそれ相応の視聴率がとれない場合には、おそらく「負け」と感じるだろう。そのあたり筑紫は少しちがいそうだ。ただその筑紫も、できるだけ多くの人に見てもらいたいと思っているのは当然だし、その意味で視聴率をとりたいと願っているだろう。しかしそうではあっても、「見られなければ負け」とまでは思うまい。つまり筑紫と久米の基本的なちがいは、「伝えるべきニュースをキッチリ伝えれば、視聴率で少々負けてもいい」と考えられるか考えられないかのちがいである。私はいくつかの理由にもとづいて、ふたりの相違をそう判断している。

また久米は番組進行について自分を筑紫とくらべた上で、「僕は他人のことはとやかくいわない主義ですが、たとえば筑紫哲也さんは時間の配分のことなんてほとんど考えていらっしゃらないと思います。“ええ、ええ、ええ。はあ、はあ、はあ、どうもありがとうござ

いました”なんて言うときがあるし、エンディングのところは女の子たちに任せちゃっている。彼はジャーナリストとして番組を動かしているんだからそれでいいんです。でも、僕はテレビのプロですから、それじゃマズい。僕はニュースキャスターでも司会者でもなくてほんとはタイムキーパーだったんですよ」(注27) と発言している。

つまりアナウンサー出身の久米は、「自分はジャーナリストではない」ことをいわばバネに、自分の場を築いているようにもうかがえる。かたや記者出身のキャスター筑紫は、理屈っぽく骨っぽく正攻法で番組を進行させる。ニュースとは何か、時代認識とは何かを考え抜いた上で、ニュースを伝えることに徹している。このようにふたりは自らの立つ場や、伝え方についての方法論を異にしながら、それでいてそれぞれに相手を高く評価している。このあたりが面白い。

望ましいキャスター像

メアリ・ジェイン・クラークの推理小説、『女性キャスター』は、ある局の看板キャスター、ビル・ケンドルが自殺するところから話が始まる。この小説のなかで看板キャスターのケンドルは、こう表現される。

> ケンドルはすぐれた資質を開花させた。観察力が鋭く、呑みこみも早かった。ベーシックな服装を好み、身だしなみがよく、いかにもアメリカ的なタイプという、当時のTVリポーターの大部分に共通する要素がそろっていた。しかし、ビル・ケンドルの肉体的資質のなかで最高のものは彼の目だった。ディレクターたちが好んでいっていたように、ケンドルの目は視聴者の視線をとらえて放さなかった。テレビ画面の向こうから視聴者をみつめ、相手の心をとらえてしまうのだ。それは信頼できる人間の目だった (注28)。

作者のクラークはCBSニュースの現職プロデューサーである。それだけに、ここに記されたケンドルの姿は、放送のプロとしての彼女が考える理想のキャスター像にちがいない。

キャスターにとってもっとも大事な資質は「信頼感」だとするこの記述には、私も同感である。信頼感を抜きにして情報の伝達は成立しない。では信頼感を築くには何が必要か。視る人を納得させ得る知性がまず不可欠だろうが、それに加えて人間としての魅力、さらには、どんなニュースが突然とびこんできても対処できる、「判断力」や「アドリブ能力」も欠かせない。

さてここにアメリカ人を対象に、「キャスターに求める資質は何か」を質問した調査がある (注29)。やや古い調査だが、回答は基本的にいまも大きくは変わるまい。

1．知的であること　69%
2．経験豊富であること　64%
3．誠実であること　40%
4．自信があること　36%
5．親しみやすさ　13%

この回答から見る限りアメリカの視聴者は、キャスターに知的な巨人を期待しているようにうかがえる。大統領よりも頭がよく、落ちついていて、すべてを安心してまかせられる人物である。

一方、日本の視聴者はキャスターに、もう少し親しみ深い人物を求めている。頭がよくて、話上手で、格好がいい人物。ファンレターを書きたくなるような知的なタレント。そのあたりが日本人のいだく望ましいキャスター像なのだろう。そのことが大手前大学の学生に行った調査から読みとれた。回答はこうだった。

1．知的であること　55%
2．話が魅力的であること　50%
3．格好がいいこと　48%
4．経験豊富であること　43%
5．人柄のいいこと　40%

長年にわたって久米宏が人気を保ちえたのはなぜか。その回答も上記にあると思えなくもない。キャスターに知的スーパーマンを求めるアメリカ人と知的なタレントを求める日本人。これはまさに日米の文化の相違である。

注

(注1)　田宮武・津金沢聡広編『テレビ放送を考える』ミネルヴァ書房、1990年、74～75ページ
(注2)　ロバート・ゴールドバーグ＋ジェラルド・J・ゴールドバーグ　平野次郎訳『トップキャスターたちの闘い』NTT出版、1991年、463ページ
(注3)　アレキサンダー・ケンドリック　岡本幸雄訳『ヒトラーはここにいる』サイマル出版会、1973年、134～141ページ、160～161ページ
(注4)　田草川弘『ニュースキャスター　エド・マローが報道した現代史』中公新書、1991年、43ページ
(注5)　新井直之「放送ジャーナリストの条件とは何か」『放送レポート』1982年9月号、8ページ
(注6)　同上
(注7)　前掲『ヒトラーはここにいる』、163～164ページ
(注8)　ロバート・ウイーナー　染田屋茂訳『CNNの戦場』文藝春秋、1992年、468～469ページ
(注9)　水越伸「エド・マローからピーター・アーネットへの伝言“あの戦争もベトナム戦争ではなかった”」『TBS調査情報』1991年5月号
(注10)　前掲『ニュースキャスター　エド・マローが報道した現代史』、78ページ
(注11)　「増補版・20世紀全記録（クロニック）」講談社、1991年、729ページ
(注12)　前掲『ヒトラーはここにいる』、65ページ

(注13) 「白書嫌いのキャスター・古谷綱正さんが語る——実践的放送ニュース論」『放送レポート』1982年9月号、18ページ

(注14) 田英夫『マスコミの危機』市民書房、1972年、39～48ページ

(注15) 岡村黎明『テレビは変わる』岩波ジュニア新書、1979年、54ページ

(注16) 磯村尚徳『ちょっとキザですが』講談社、1975年、253～254ページ、260ページ

(注17) ウォルター・クロンカイト　浅野輔訳『20世紀を伝えた男　クロンカイトの世界』TBSブリタニカ、1999年、326ページ

(注18) 同上、482～485ページ。なお作家の幸田真音が「週刊メディア通信簿」(『週刊現代』2002年3月9日号) に書いているところでは、クロンカイトの後継者ダン・ラザーはある日の「イブニング・ニューズ」で、「卒直に言って、ラジオ、テレビでこれ以上深く掘り下げて報道するには限界があります」と述べ、このあとについては「明日あなたが信頼する新聞をご覧ください」と発言したことがあるそうだ。

(注19) 松岡由綺雄編『現場からみた放送学』学文社、1996年、98ページ

(注20) 久米宏「ニュースステーションのすべてを語る・僕はキャスターじゃない。タイムキーパーだ」『文藝春秋』1995年7月号、266ページ

(注21) 同上、267ページ

(注22) 木村太郎『ニュースへの挑戦』日本放送出版協会、1988年、210ページ

(注23) 前掲『ニュースステーションのすべてを語る・僕はキャスターじゃない。タイムキーパーだ」、268ページ

(注24) 「筑紫哲也インタビュー・日本ならではのキャスターニュースがあっていい」『放送文化』1995年12月号、53～54ページ

(注25) 前掲「ニュースステーションのすべてを語る・僕はキャスターじゃない。タイムキーパーだ」、270ページ、275ページ

(注26) 同上、269ページ

(注27) 同上、264ページ

(注28) メアリ・ジェイン・クラーク　山本やよい訳『女性キャスター』講談社文庫、2000年、52～53ページ

(注29) 前田勝「ニュースキャスターの最大の条件は“信頼される”ということである」『新放送文化』1986年3月号、22ページ